

(第二十章)

時の本性が欠如すると示す>時が本性として有る理由を否定する>時は果が起こる俱有縁であることを否定する>

[章の著述を説く]

言う。「時は有るのみである。何故かといえば、まさしく時と集合することより果が成立する故である。ここに土と種子と水が既にあったとしても芽が生えるとはならないが、それらが時を集めてまさしく集合となった時に芽が生えることになる。従って、そのように、何故ならばまさしく時との集合が無ければ芽が生えることにならないが、有ればなる故に、時とは有るのみである。」

章の著述を説く>因縁の集合より生じることを否定する>以前の集合より生じることを否定する>集合より直接生じることを否定する> [集合における有・無が生じることを否定する]

説く。もし、果が生じること自体が合理となるならば、果が生じるので時も有るとなろうが、果が生じること自体が不合理であるので、果の因（理由）を持つ時が有ると何処でなろうか。

このように、もし集合そのものより果が生じるとなれば、その果はその集合そのものに有るか、無いより生じるとなるのか？と問えば、双方よりもその生は不合理である。如何様にといえば、

もし、諸々の因と縁の、
集合そのものより生じるとなれば、
集合に果が有るならば、
如何様に集合そのものより生じようか。 1

集合の事物とは、集合そのものである。もし、諸々の因と縁の集合そのものより果が生じるとなれば、その集合そのものにその果がまさしく有るならば、その存在する果が如何様に集合そのものより生じるとなろうか。もしそれが有るとしても再度生じるとなれば、そう見ればその生について考察することはまさしく無意味となる。このように、有において再度生じて、何をしようか。無限である背理ともなる。(何故ならば) このように、いつ時も生じないとならない故である。

もしまた、こう『諸々の因と縁の集合そのものに果は無く、諸々の因と縁の集合そのものに果が無いものが生じるとなる』と思惟すれば。

それに説こう。

もし、諸々の因と縁の、
 集合そのものより生じるとなれば、
 集合に果が無ければ、
 如何様に集合そのものより生じようか。 2

もし、諸々の因と縁の集合そのものより果が生じるとなれば、その集合その自体にその果がまさしく無いのであれば、その無い果が、如何様にその集合そのものより生じるとなろうか。もし無くとも生じるとなれば、そう見れば、それは生じたとしてもまさしく無となる。生じる段階で無いものが生じたならば、如何様に有るとなろうか。このように、黄牛が生まれるようにはならない。

集合より直接生じることを否定する > [集合において有無そのものを否定する]

また他にも、

もし、諸々の因と縁の、
 集合に果が有るならば、
 集合に認められる対象として有るべきであるが、
 集合そのものに認められる対象として無い。 3

もし、諸々の因と縁の集合そのものにその果がまさしく有るのであれば、その集合そのものに確実に留まるそれは、木にとまった鳥の如く認識される対象として存在する類であるが、そこにそれが存在しようとも認識される対象として無く、その認識される対象として無いものを、如何様に有るとするのか。そう見るので、集合そのものに果が有るとは不合理である。

もし、諸々の因と縁の、
 集合に果が無ければ、
 諸因や諸縁も、
 因縁でないと等しくなる。 4

もし、諸々の因と縁の集合そのものにその果がまさしく無いのであれば、諸因と緒縁も、因や縁でない諸物と等しくなる。そう見れば、一切より一切が起るとなるので、それも主張しない。そう見るので、集合に果の無い生は不合理である。

言う。「そうではない。(何故ならば) 因と縁が確かである故である。もし、

一切が一切の因や縁であるとなれば、そう見れば『一切より一切が起こるとなるろう。』と言うに適うが、一切は一切の因や縁ではない。このように、確実な（特定した）因と縁が見られる。大麦の種子よりもまさしく大麦の芽は生えるが、稲の芽は生えず、因の織糸よりもまさしく絨毯が現れるが、壺は現れないので、そのように、何故ならば因と縁は確実である故に、一切より一切が起こるとはならない。」

説く。不可である。（何故ならば）確かである理由を示していない故である。君は「このように因と縁は確かである。」という確実な理由を示していない。もし（理由が）無ければ、それが確実に留まる理由のないことが、如何様に適うとなろうか。そう見るので、確実である理由が無いので、因と縁は、諸々の因や縁でないものと等しい背理となるだろう。そのように一切より一切が起これば、大麦の種子にも大麦の芽も無いけれど、稲の種子にも稲の芽は無く、そこで二つとも無ければ、「大麦の種子は大麦の芽だけの因であるが、稲の芽の因ではない。」というこの確実性は何から来たのか。

諸々の因と縁に果が有るならば、果が有ることによって確実となることも合理となろうが、それも無く、それが無ければ、確実である理由の無いそれが如何様に適うとなろうか。そう見れば、確実である理由が無いので、因や縁は因や縁でない諸物と等しい背理そのものになるのである。

言う。「顕現に、理由である言葉の意味は無い。まさしく顕現として大麦の種子よりもまさしく大麦の芽は生えるが、稲の芽が生えない時、他の理由を探して何の必要性があるのか。」

説く。確実であると映ることも、諸々の因と縁に果が有るならば合理であるが、無ければ不合理であるので、それ故に「無は生じない。」という。そう見るので、無が生じる何か他の理由が示されるべきである。然れば、その他の理由によって無が生じると良く成立したならば、確実に見られるので、一切より一切が起こるとはならないものであるが、無が生じる他の理由も示さないで、それ故に、確実であるとするのは、まさしく集合に果が有ると示すのである。

以前の集合より生じることを否定する > [集合より間接的に生じることを否定する]

言う。「ここで、因が果に因を与えて滅すので、それ故に因によって果が成立するとなり、緒縁はそれを利益するものであるので、そこで『集合そのものに果が有るのか無いのか』というその思惟で何をしようか。」

説く。

もし、因が果に、
因を与えて滅すとなれば、
与えた分と滅した分の、
因の我性は二つとなる。 5

もし、因が果に因を与えて滅すとなれば、そう見れば、その与えたものと滅したものによって、因の我性は二つとなる。因の我性が二つであるとは不合理である。(何故ならば) 滅したものは生じさせられるのではない故である。因が与えたことも不合理である。(何故ならば) 有・無の果に因が施すことは不合理である故である。このように、有る果に対して、再び因が与えて何をするのか。無に対して、何ものに施すのか。

言う。「因が果に因を与えて滅すのではないが、このように因が滅したやいなや果が生じる。」

説く。

もし、因が果に、
因を与えずに滅すとなれば、
因が滅してから生じた
その果は無因となる。 6

もし、因が果に因を与えずに滅したとなれば、因が滅し失壊して生じたその果は、無因より起こったとならないか？無因より生じたとは主張しない。(何故ならば) 多くの過失の背理となる故である。

因縁の集合より生じることを否定する > [同一時の集合より生じることを否定する]

言う。「果は、因と集合と一緒に生じる。灯明と光の如く。それ故に集合と果は同一時のみに起こり、灯明と光の如くであるので、それについて、『集合そのものに果が有るか無いか』というその思索は不合理である。」

説く。

もし、集合と一緒に、
果も生じるとなるならば、
生じさせるものと生じさせられたものが、
同時である背理となる。 7

もし、集合と果がただ一緒に生じるとなれば、そう見れば、因である生じさせるものと、意味（目的）である生じさせられるもののそれらが同一時に起こる背理となるので、それも不合理である。このように、父と子が同一時に如何様に生まれるとなろうか。仮にまた生じるとなるならば、そこで「これはこの因である。」「これはこの果である。」というこの設定が、如何様に有るとなるうか。そう見るので、集合そのものと果が一緒にくることは不合理である。

因縁の集合より生じることを否定する > [後時の集合より生じることを否定する]

言う。「果は、集合そのもののまさしく以前に有る。それは後に集合そのものが生じたことによって明らかにする。灯明によって壺（が明らかになる）の如くである。

説く。

もし、集合の以前に、
果が生じたとなれば、
諸々の因と縁の無い
無因の果が起こるとなる。 8

もし、因は以前にまさしく有るのであるが、後の集合によって現れるとなれば、そう見れば諸々の因と縁が無いことと、諸々の因と縁が結ばれていない果が無因より起こったとなるだろう。生じた果についても、因と縁の集合において再度生じると考察して何をするのか。このように、果の為に因と縁が集まると主張すれば、その果もまさしく既に生じているのである。そう見るので、それも凡々である。

章の著述を説く > 因そのものより生じることを否定する > [因果は同一本質であるという説を否定する]

言う。「因が完全に変化することより果として成立する。それ故に、前時点が滅すことより因が滅したならば、果に変化する。そう見れば、因が滅していかなくとも果にはならず、その果は無因より起こったともならない。」

説く。

もし、因が滅して、果に
因が全く移行するとなれば、
以前に生じた因も、
再び生じる背理となる。 9

もし、因の事物が以前に滅して他の時点を得たものを「果」とするならば、そう見れば、因は全てにおいて移行するとなるけれど生じるのではない。例えば踊り子が他の衣装を捨てて他の衣装を着けることは、生まれるのではないが如くである。もしまた、他の時点に全てにおいて移行すること自体が生じることであれば、そう見るとしても、以前に生じた因そのものも生じる背理となるだろう。そう見るとしても、尽く変化する主体である諸事物は確実に留まらない故に、いつ時も生じないとはならないだろう。

言う。「『因が滅したならば果となる。』と述べられる時、何故『全てにおいて移行するとなる』や『再び生じる背理となる。』と述べるのか？」

説く。何？君は道に入っていないながら道を問うのか？君は「尽く変化した事物を果という。」と言いながら、自らの言葉の意味を理解していない。それ故に、君はとても疲れただろうからもう良い。座っていたまえ。ここで吾輩が、教示の見解は因果としての関係であると考察者達へ示すので、君は心意を集中させて聴きたまえ。

因そのものより生じることを否定する>因果は別本質であるという説を否定する>因が、果が生じる行為を準備することを否定する> [滅した因と、留まる因が果を生じさせることを否定する]

ここでもし、因が果を生じさせるとなれば、滅したもののか、留まるものが生じさせるのか？と問われる。果もまさしく生じたもののか、生じていないものを生じさせるのか？と問えば、一切の様相も不合理である。如何様にといえば、

滅し消えたものが、
生じた果を如何様に生じさせようか。
果と関係する、
留まる因も、如何様に生じさせようか。 10

もし先ず、一切の様相において滅し消えた因が、生じた果を生じさせると考

えれば、それは正理ではない。このように、滅し消えた因が、生じたまさしく存在する果を如何様に生じさせようか。無因であるものが生じさせると考察されるそれも何であるか。まさしく生じたものも、何が生じさせられる必要があろうか。

もしまた、こう『まさしく留まる、果を具える、果と関係する因が、果を生じさせる』と思惟すれば。

それも不合理であり、このように留まる因が、まさしく存在する果を如何様に生じさせようか。それ故に、ある時にまさしく生じた果と因として関係するのであるが、生じていないものとはではない。生じたものに、再び生じさせる因が何をしようか。そう見るので、それも不合理である。

もし、因果が関係していなければ、
如何なる果を生じさせようか。

もし、『果を具えない、果と関係していないその因が、果を生じさせる』と思惟するならば。

君の如何なる果を因が生じさせるのかを言いたまえ。果は生じていない故に、無において「果」というもの自体も無い時、「因が果を生じさせる。」というそれが、如何様に合理となろうか。仮にまた、無くともそれに、それを生じさせる能力そのものが有るとなれば、それによって兎の角も生じさせられることになるに、疑いは無い。

因が、果が生じる行為を準備することを否定する > [因は、見て・見ておらずに果を生じさせることを否定する]

また他にも、

因は、見ても見ておらずとも、
果を生じさせることはしない。 11

ここで、もし因によって果が生じさせられたとなれば、見てか？見ておらずに生じさせるとなるか？と問えば、双方の如くとも不合理である。

如何様にといえば、もし先ず、見て生じさせるとなれば、そのようであれば生じたものを生じさせるとなり、このように生じていないものを見るとはならないが、生じたものは再び生じさせられる必要はない。

もしまた、因が見ておらずに果を生じさせると考えれば、そう見るとしても、因が見ていない何やかやを、それやそれが生じさせるとなるものであるが、生じさせることもしない。そう見るので、因が見ておらずとも果を生じさせることはしない。

因果は別本質であるという説を否定する > [因が接して・接さずに果を生じさせることを否定する]

また他にも、ここで、もし因によって果が生じさせられるとなれば、接して生じさせられるとなるのか？と問えば、果と因が接したことは如何様にも不合理である。如何様にといえば、

過去となる果は、過去となる因と、
生じていない因と、生じた因と、
一緒に接したとなることは、
いつ時にも有るのではない。 12

過去となる果は、過去と、生じていない因と一緒に接したことは、いつ時も有るのではない。(何故ならば) 過去と未来である果と因は無い故である。

過去となる果と生じた因も、一緒に接したことはいつ時も有るのではない。(何故ならば) 果は無い故である。

生じていない果は、生じていない因と、
過去の因と、生じた因と、
一緒に接したとなることは、
いつ時にも有るのではない。 13

生じていない果は、生じていない因と、過去である因と一緒に接したとなることはいつ時も有るのではない。(何故ならば) 過去と未来である果と因は無い故である。

生じていない果と生じた因も、一緒に接したことはいつ時も有るのではない。(何故ならば) 果は無い故である。

生じた果は、生じた因と、
生じていない因と、過去の因と、
一緒に接したとなることは、
いつ時にも有るのではない。 14

生じた果は、生じた因と一緒に接したことはいつ時も有るのではない。(何故ならば)「これはこれの因である。」「これはこれの果である。」というように、因と果として不合理である故と、そのようになったものに、接したことも不合理である故である。

生じた果と、生じていない因と過去である因とも一緒に接したとなることはいつ時も有るのではない。(何故ならば)過去と未来である因は無い故である。

接したことが有るのでなければ、
因が果を如何様に生じさせようか。

それ故に、そのように過去と未来と現在となる果と、過去と未来と現在となる因に、一緒に接したとなることは一切の様相において不合理であれば、「因が果を生じさせる」とは如何様に合理となろうか。

接したことが有るとしても、
因が果を如何様に生じさせようか。 15

もし、不合理でありながらも因と果は接したと考えれば、そう見るとしてもまさしく存在する因が、その果を如何様に生じさせようか。このように、存在においては再度生じさせられるものは無く、因の行為(働き)も無い。

因が、果が生じる行為を準備することを否定する > [果が欠如する・欠如しない因が果を生じさせることを否定する]

また他にも、

仮に果が欠如する因が、
如何様に果を生じさせようか。

ここで、もし因が果を生じさせるならば、それは果の我性が欠如するか、欠如しないものがその果を生じさせるのか?と問えば、そこで先ず、もし果の我性が欠如する因が果を生じさせると考えるならば、それは如何様にも不合理である。もし合理であるならば、砂も胡麻油や、水もバターを生じさせるとなるだろう。あるいは、砂と胡麻ともに胡麻油は無く、水とヨーグルトともにバターは無いと類似するけれど、まさしく胡麻より胡麻油は現れるが、砂より現れないことや、まさしくヨーグルトよりバターは現れるが、水より現れないことにおいて、如何なる違いがあろうか。そう見るので、「果の我性が欠如する因が果を生じさせる。」というそれは不合理である。

そこでこう、『果の我性が欠如しない（因が）果を生じさせる』と思えば。

それに説こう。

仮に果が欠如しない因が、
如何様に果を生じさせようか。 16

もし、果の我性が欠如しない因そのものであるならば、それが如何様にその果を生じさせることが合理となろうか。ある時、果がまさしく有るのであれば、それは自性が欠如するのではない。既に生じたものにおいて、再び生じさせられるものは無い。そう見るので、「果の我性が欠如しない因が果を生じさせる。」というそれも、本質を斥けられない者によって捉えられるものである。

根本中論註ブッダパーリタ。第八卷。

因が、果が生じる行為を準備することを否定する＞ [空・不空である果を因が生じさせることを否定する]

また他にも、ここで「因が果を生じさせる。」というそれも、自性が欠如して
いない（不空）か、欠如する（空）ものが生じ、滅すとなるか？と問えば、
それに吾輩が説こう。

空でない果は、生じるとならない。
空でないものは滅すとならない。
空でないそれは、滅しておらず、
生じていないともなるのだ。 17

自性が欠如しない、自らの我性として確実に留まるものであるその果は、生
じるとならず、滅すともならない。何故かといえ、自らの我性として確実に
留まる故である。このように、本性において変化は不合理であるので、それ故
に、その果は不空であると尽く考えるならば、恒常である故に、君のそれは滅
しておらず、生じていないともなるだろう。そう見るので、不空の果は生じる
とならず、滅すともならない。

そこでこう、『空である果が生じ、滅すとなる』と思えば。

それに対して説こう。

空が如何様に生じるとなり、
 空が如何様に滅すとなろうか。
 その空も、滅しておらず、
 生じていない背理ともなる。 18

自性が欠如する、我性として良く成立していないものであるその果が、如何様に生じるとなり、如何様に滅すとなろうか。

仮に、その果は自性が無くとも生じ滅すと尽く考えるならば、それについて言及しなければならない。

仮に、果の本質以外の他の何かが生じ、滅すとなるのか？

仮に、果の事物以外の他の何かが生じるとなれば、それが果にどう変化しようか？このように、果ではなく生じるものは、果にならない。そう見るので、その果を空であると尽く考察しても、無い故に、滅しておらず生じていない背理ともなるので、それも不合理である。そう見るので、空である果も生じるとならず、滅すともならない。

因が、果が生じる行為を準備することを否定する＞ [同一本性と別本性の因が果を生じさせることを否定する]

また他にも、もし因と果になれば、まさしく同一か、まさしく別になるか？と問えば、それも尽く考察したならば、

因と果がまさしく同一であるとは、
 いつ時も合理とはならない。
 因と果がまさしく他であるとは、
 いつ時も合理とはならない。 19

何故かといえば、このように、

因と果がまさしく同一であれば、
 生じさせるものと生じさせられるものが、同一となる。
 因と果がまさしく他であれば、
 因と因でないものが等しくなる。 20

このように、もし因と果がまさしく同一であるとなれば、そう見れば、生じさせるものと生じさせられるものがまさしく同一義となるので、それも不合理であり、このように父と子が、如何様にまさしく同一となろうか。種子と芽も

まさしく同一とはならない。

もしまた、因と果が「これは因である。」「これは果である。」というまさしく他となれば、そう見るとしても、因と因でないものが等しくなるだろう。斯くも、麦の芽より稲の種子が他であるが如く、稲の芽よりも麦の種子は他であるならば、そこで「麦の種子は麦の芽の因であるが、稲の種子はそうではない。」ということが、何故そのようになろうか。

そう見るので、因と果はまさしく同一でもないが、まさしく他であるとも不合理である。まさしく同一か、まさしく他として成立したことが有るのではないそれらに、成立は無い。(何故ならば) それらより他に成立することは不合理である故である。

因が、果が生じる行為を準備することを否定する>

[自性として有る・自性として無い果を因が生じさせることを否定する]

また他にも、もし因が果を生じさせるならば、それは自性として有るとなるものを生じさせるのか？無いとなったものを生じさせるのか？と問えば、それに吾輩が説こう。

果が自性として有るならば、
因が何を生じさせようか。
果が自性として無ければ、
因によって何が生じさせられるとなろうか。 21

もし、果が自性として有るとなれば、為さずとも完全にまさしく存在するので、それが有るならば、因がそれに対して、他の何を生じさせようか。もし『まさしくそれを生じさせる。』と考えれば、それは正理ではなく、生じたものに、再び生じる行為は無い。

もし、その果が自性として無いとなれば、それを因が如何様に生じさせるとなろうか。もし、果が自性として無くとも因によって生じさせられるとなるならば、稲の花でも数珠を綴れることに疑いは無い。そう見るので、有となる果と、無となる果も、因によって生じさせられることは不合理である。

因果は別本質であるという説を否定する> [因そのものが本性として有ることを否定する]

生じさせるものでなければ、
因そのものは合理とはならない。

如何なる因も、果を生じさせなければ、それはまさしく因として合理とならない。このように「生じさせる因」というけれど、もし生じさせるものでなくとも因となるならば、そう見れば、何も因ではないとならないので、「一切が因そのものとなるだろう。」ということも主張しない。そう見るので、因そのものは合理であるとはならない。

因そのものに合理が有るのでなければ、
果は何のものであるとなろうか。 22

もし、果が生じさせられる因そのものが有るのでなければ、因が無ければその果は何のもの（果）となろうか。このように、因の果であると主張するならばそれも無く、それが無ければ「果」というものとして不合理である。もし合理であるならば、父が無くとも子が有るとなるので、それも主張しない。そう見るので、因が有るのでなければ、果が有るのでもない。

章の著述を説く > [因縁の集合より生じることを否定する他の正理を示す]

諸因と諸縁による、
集合であるそれが、
我が我性を生じさせなければ、
果を如何様に生じさせようか。 23

「諸々の因と縁の集合は、果を生じさせる」と考察されるものとして、先ず、我が我性を生じさせることはしない。何故かといえ、集合とは複数であると知る故であり、阿闍梨聖提婆も、

「集合は単一ではなく、その如く事物は何も無い。もし、それもそれより他であれば、それも単一の何が有ろうか。」¹

と説かれた。

ここで、我性が生じていない、我性が良く成立していない集合であるものが、果を如何様に生じさせるかを考察しよう。もし、我性が生じていない集合によっても、果を生じさせるならば、生まれていない母によっても、子を生まれさせることが実現するだろう。

それ故に、集合が為したことと、
集合でないものが為した果は無い。

¹ 「集合は…有ろうか。」：？

果が有るのでなければ、
縁の集合が何処に有ろうか。 24

そのように、何故ならばその集合は我性が生じておらず、良く成立していない故に、集合が為した果は無い。

そこでこう『集合でないものが為した果が有る』と思えば。

それに説こう。

「果でないものが為した果は無い。」

集合が為した果そのものが不合理である時、無因より起こった、集合でないものが為した果が如何様に合理となろうか。もし（合理と）なるならば、父母達がいなくとも子が生まれるとなるものであるが、（子は）生まれるともならない。そう見るので集合でないものが為した果も無い。

言う。「非常に多くの世間と反することを説いたこれによって、何をするのか？有であれば先ず、諸々の因と縁の集合は有り、それが有るので果も有るとなる。」

説く。何？君は空っぽの村に城塞を落としたのか？君は、果が有るのではないけれど集合が有ると主張している。「果をまさしく生じさせる集合」というならば、果そのものも如何様にも不合理である時、果が有るのでなければ、縁の集合が有ると何処でなろうか。

阿闍梨聖提婆も、

「何故ならば、世間で見られる全ての名称は、集合そのものに現れる。

それ故に事物は有るのではなく、無事物の集合も有るのではない。」²
と説かれた。そう見るので、果は有るのではない故に、集合も有るのではないので、そこで「時との集合そのものの果が成立する故に、時は有るのみである。」と言ったことは不合理である。

言う。「もし、時も無い。因と果と集合も無ければ、他の何が有ろうか。そう見るので、それはまさしく虚無を語るのだ。」

説く。そうではない。君が、時等は自性より存在すると尽く考えるようには不合理であるに尽きるが、それらが依拠して名付けられたとは成立する。

² 「何故…ではない。」：？

ブッダパーリタ [第 20 章]

時は果が起こる俱有縁であることを否定する > [章の名を示す]

「因と果を考察する」という第二十章である。

DECHEN 訳